

序

麻醉業務は宝の山

～手術の流れを理解すれば、麻醉はもっと面白くなる！～

麻醉科医は日々の手術麻醉を通じ、おそらく1日あたりで片手におさまる程度の数の患者に麻醉と全身管理を行っている。これは、外来診療を主体とする各科医師が数十人～百人単位の患者を診察するのと比べ、一見非常に少ないようにみえる。しかし、実は対象とする患者数が少ないからこそ、麻醉科医は一人の患者と濃厚に向き合うことができる恵まれた職種なのである。術前訪問でカルテと画像を眺め、手術に至る病歴を知り、合併症を知り、患者を診察したうえで手術に立ち会い、術後どのような経過になるのかを回診で見守る。一人の患者が迎える入院中の最大のイベントである手術。その手術麻醉を基点として、コンパクトに病態を知り、手術を知り、全身管理を学ぶことができる。しかもその対象は外科系患者のほぼすべてを網羅するといっても過言ではない。そして、手術中に患者を見守るプロセスのなかで麻醉科医は、外科系医師や研修医・医学生が必死に覗き込む術野を患者頭側の特等席からいつでも見ることができる機会に恵まれているのだ。

さて、外科系医師は手術書を、術場看護師は手順書を読み、手術に備える。その一方で、麻醉科医が簡単に手術の流れを学べる書籍はこれまでにほとんど皆無だったのではないだろうか。担当した手術の流れを知り、病気を知り、術前・術後の経過に自分がより積極的に興味をもち、関わることで、麻醉はもっと楽しく、自分を豊かにする勉強の場にも変わっていくはずだ。しかも目の前にライブで広がる手術野には、機械の使い方、結紮のやり方、ドレーンの

留置や固定法，創洗浄やデブリードマン，縫合方法など，ER や病棟での応急処置に必要な外科手技の基本事項が無数に散りばめられている．本書は，麻酔を勉強する初期・後期研修医が手術の流れを理解し，興味をもつことで，疾患を通じた知識をより強固にし，麻酔のみならず救急・集中治療やプライマリ・ケアに広く役立てるきっかけを提供するために作られている．麻酔の1症例から学べることは非常に多岐に渡る．1例1例と大事に向き合うことで，初期・後期研修が終了した際に残される財産を作ることができる．本書を片手に，読者のみなさんの麻酔研修期間がより有意義になることを期待し，また指導側の立場の医師には1例の麻酔がもたらす魅力を最大限に後輩医師に伝えるためのヒントとなれば幸いである．

2013年4月

編者を代表して
鈴木昭広
旭川医科大学救急部